

歴史認識問題を自分の「持ち場」から考える

吉田 裕

『世界』に連載していた論文をまとめて、1995年に『日本人の戦争観』という本を岩波書店から出版した。類書がないこともあって、幸いにも版を重ね、今は岩波現代文庫に加えていただいている。その出版から、もう早いもので、20年近い月日が流れたことになるが、執筆時に漠然と感じていた「今後の歴史的展望」のようなものを、箇条書きにしてみると次のようになる。本来ならば、舞台裏に属する事柄であるが、正直に書いてしまおう。

(一) 歴史認識の問題として考える限り、満州事変からアジア・太平洋戦争に至る一連の戦争を「侵略戦争」、少なくとも正当化できない戦争と考える人が、今後は多数派となる。逆に言えば、その戦争をアジア解放のための戦争、あるいは自衛のための戦争と考える人々が多数派となることはあり得ない。

(二) もちろん、復古的保守派からの強烈な巻き返しが予想できるが、この変化は不可逆的なものである。なぜなら、その変化の背景には、冷戦の終焉、アジア諸国の経済成長と民主化、日本とアジア諸国の経済関係の緊

密化などの大きな歴史的転換があり、日本の保守本流も、経済大国から政治大国・軍事大国への転換に伴って、戦争責任や歴史認識の問題が大きな障害となつてきていることをはっきりと自覚してきているからである。また、日本における攻撃的ナシヨナリズムの高揚が東アジア情勢を不安定なものとし、それが反米ナシヨナリズムに転化することを危惧するアメリカも、ナシヨナリズムの高揚には抑止的な態度をとるだろう。

この認識を前提にして考えて見ると、2007年9月の第一次安倍晋三内閣崩壊までの時期あたりまでは、一応想定内の変化だと言えるだろう。「新しい歴史教科書をつくる会」の動きや小泉首相の靖国神社参拝などの動きはあったものの、世論調査でみる限り、かつての戦争を自衛戦争と考える人の割合は常に1割前後だったし、改憲を正面から掲げて登場した第一次安倍内閣は世論の反発を受けて自滅した。さらに、靖国神社参拝問題や慰安婦問題はアメリカにも波及し、日米両国にとっても、歴史認識の問題がデリケートな問題となりつつあることが明らかになった。

しかし、その後の展開は、私の想定を超えるものだった。領土問題をめぐる攻撃的ナシヨナリズムの台頭と拡大、日韓・日中間におけるナシヨナリズムの負のスパイラルとも言うべき現象、保守政党とマスコミの急速な右傾化、2012年12月選挙における自民党の圧勝などである。なぜ、こうした事態が生じたのかという問題については、グローバルゼーションと構造改革が進展する中で、日本社会と国民意識の変化がどのように進化したか、といった問題なども含めて多面的な分析が必要だが、私自身には、そうした能力はない。そこで、まず自分自身の「足場」、「持ち場」である歴史学の問題として、問題を自己批判的にとらえ直してみたい。

第一には、私自身が父や母の世代の戦争体験の問題に、これまで、どこまで真剣に自覚的に向きあつてきたのかという反省である。



『ウォールストリートジャーナル』2013・7・18より

悲惨な戦争を体験した日本人の中から、戦後、戦争や軍隊に対する根強い忌避感が形成され、それを基盤にして、戦後日本社会に特有の平和意識が確立した。それは、戦争の被害者としての自己認識を核にしたものではあったが、保守対革新という対立の図式を超えて広い国民層の間で形成されたものであり、1980年代から1990年代に入ると、かつての戦争の侵略性に対する認識もしだいに形成されるようになる。『日本人の戦争観』の結論の一つは以上のようなものだが、ここに来て強く感じるのはこの戦争体験世代の存在の重みである。総務省によれば、2008年の時点で、1945年8月15日以降に生まれた者が総人口の75・5%を占めている。これに対して戦中派の中心である、いわゆる「大正生まれ」は、総人口のわずか4・4%にすぎない（『朝日新聞』2009年4月17日付）。昨今の歯止めを失ったような右傾化の原因の一つは、軍事大国化、右傾化の抑止力となってきたこの世代が、世代としては消滅しつつあることに求められるだろう。政治家の場合、その傾向が特に著しい。

しかし、1954年生まれの私は、父や母から戦争の時代の話聞き出そうとした経験が一度もない。これは私たちの世代の共通の特徴のようだ。むしろ、彼ら、彼女らの戦争体験に意識的に背を向けることによって、青年期の自己形成をとげた世代だという思いが強い。政治的には、戦争体験世代の平和意識

に安易に寄りかかりながら、右派の攻勢に對抗してきた。それにもかかわらず、屋嘉比取が『沖縄戦、米軍占領史を学びなおす』（世織書房、2009年）においていうような意味で、体験から「学びなおす」姿勢を持ちえなかったのである。その意味では、最近書いた『兵士たちの戦後史』（岩波書店、2011年）は、そうした私自身の反省の書でもある。

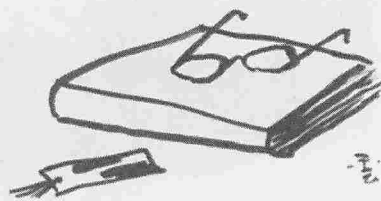
もう一つの問題は、戦後生まれの「戦後責任」の問題を掘り下げることができなかったことである。戦争の直接の当事者ではない世代が、戦争責任と自分自身との位置関係を明確にするための概念が「戦後責任」だと思いが、この問題は問題提起のレベルにとどまってしまった。父も母も戦争体験世代であり、戦争の傷跡や戦争の生々しい記憶が社会の中に残されていた時代に生まれた私たちの世代こそが、戦争体験世代と、私たちのあとに続く世代とを架橋すべき位置にいたように考えられるが、充分なことではできなかった。「新しい歴史教科書をつくる会」は、いわば、その間隙を縫って、直接的な当事者意識を持っていない世代の、対日批判に対する即時的な反発を、組織化しようとした運動として位置づけることもできるだろう。気の重い時代だが、まず自分の「持ち場」から、常に問題をとらえかえそうとする姿勢だけは失いたくない。

（よしだ・ゆたか／一橋大学教員）

▼表紙絵の作者 ▲



小野 春男
（おの・はるお）



1917（大正6）年6月22日、京都に1男5女の長男として生まれる。父は日本画家の小野竹喬。京都市立衣笠小学校、京都府立第3中学校卒業。1940（昭和15）年3月、京都絵画専門学校（現・京都市立芸術大学）本科卒業。1941（昭和16）年、京展に「樹林」出品。1942（昭和17）年、中国に出征。嵐109連隊3大隊11中隊に所属。1943（昭和18）年11月2日、湖南省北部の常德総攻撃の際に歩哨に立ち、狙撃され戦死。享年26。